

ハンガリー動乱50年：ナジ・イムレの運命

盛田 常夫

ユーゴスラヴィア大使館に逃げ込んだナジ首相グループをどう取り扱うのか。これがブダペストに戻ったカーダールが最初に取り組んだ問題だった。

カーダールは当初、ナジ・イムレが首相辞任を表明して政府消滅を認めれば、国外亡命を容認し、他方でグループから新政府に協力する人々を受け入れることを考えていた。ユーゴスラヴィア政府もこの線での解決を望んでいたと思われる。事実、ティトの仲介によって、これを実現しようとしていた。

しかし、ソ連共産党政治局は早々と11月10日に、ナジ・グループの命運を決する決定を行った。しかし、そのシナリオは実行直前までカーダールに知らされず、もちろんユーゴスラヴィア共産主義者同盟にも知らされなかった。

ナジ・グループ処遇をめぐる状況

ナジ・グループが英雄広場の角にあるユーゴスラヴィア大使館に逃げ込んだ理由は明白である。当時、ユーゴスラヴィア共産主義者同盟はスターリン型の集権的ソ連社会主義を批判し、自主管理型社会主義を目指して、ソ連共産党とは一線を画していたからだ。いかに対立関係にある共産党といえども、ソ連は簡単に手を出せないだろうという判断があった。

しかし、ユーゴスラヴィアにとって、急に飛び込まれた客人の扱いは難しいものだった。ユーゴスラヴィア側は、ナジ・グループが自己批判に署名し、安全に亡命あるいは帰還する道を探っていた。しかし、この方法はナジ・グループの拒否にあって膠着状態に陥った。カーダールとユーゴスラヴィア大使との間で、帰還させる条件や身の安全確保の保証について、議論が続いていた。

ソ連共産党がナジ・グループ処理のシナリオをカーダールに伝えたのは11月16日である。カ

ーダールがレアーニィファルの「占領本部」に出向いた時に、マレンコフからソ連共産党の方針が伝えられた。カーダールはこの方針を受け、ソ連の奸計を知りながら、ユーゴスラヴィア大使に虚偽の約束を行い、ナジ・グループを大使館からおびき出す役割を与えられたのである。

11月22日午後、ソ連軍兵士が運転するバスがユーゴスラヴィア大使館に横付けされた。当初の約束に反し、ナジ・グループはKGB本部が設置された軍事学校へ連行され、そこからルーマニアへ移送された。このニュースは瞬く間にブダペストの街に広がり、カーダールの評判をさらに落とすことになった。

かくして、ナジ・グループはソ連の捕虜となったのである。当初からこのシナリオにカーダールが介入する余地は残されていなかった。カーダールはソ連の使い走りにすぎなかった。

ソ連共産党の意図

ソ連共産党の意図は最初からはっきりしていた。ハンガリーにおける「反革命」はいかなる手段をとっても徹底的に弾圧すべきもので、そこに妥協の余地はない。安易な妥協を許せば、欧州における戦後社会主義体制の環が崩れると考えていたことは間違いない。

ナジ・グループの処理が終わり、マレンコフは12月にソ連に戻ったが、ソ連共産党はハンガリーへの監視を強めるために、国際的な共同戦線を強めた。フルシチョフは1月初めに、ハンガリー情勢討議のために、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニア、チェコスロバキアとの5カ国共産党会議を開催し、さらに周恩来とフルシチョフのモスクワ会談にカーダールを呼んだだけでなく、その後に中国共産党代表団がハンガリーを訪問し、「反革命」にたいする国際的連帯を謳った。こうして、ハンガリーを包囲する国際的な戦線が敷かれた。

カーダールがナジ・グループとの協力関係を築くことは「反革命」の火種を抱えることになる。だから、この繋がりを徹底して断つことが、ソ連共産党および国際共産主義運動の共通の利益になるという理解であった。

革命と反革命：カーダールの理解

いかにソ連共産党から傀儡の役割を期待されようとも、カーダールは自らの役割の正当性の立証に拘った。マレンコフがソ連に戻る直前の12月初め、レアニィファルの占領本部に出向いたカーダールは党の指導部会議で報告する内容の概要を伝えた。それは動乱の革命・反革命の性格規定にかんするものだった。

カーダールは動乱の過程を三つの時期に区分することに拘った。

まず、11月23日から30日の期間。反革命分子が現状の不满を訴える労働者大衆の正当な要求を、自らの目的のために利用しようとした時期と規定した。

次に、10月31日から11月4日の期間。反革命が勢いづいた時期で、共産党組織、国家保安局、警察が襲撃され、多数が殺害された反革命の最盛期だと規定した。

そして、11月4日以後は、反革命を鎮圧する時期と規定した。

カーダールは一連の事態を三つの時期に区分することによって、自らの役割を正当化できると考えた。当初は革命的性格をもっていたが、次第に反革命の色彩が強まり、その反革命を鎮圧するために、自らの出番がきたと。これは彼の中道路線と一致するものだった。

カーダールは一貫して、56年動乱の原因はラーコシーゲル一派による誤った指導にあると考えていた。したがって、これにたいする反乱は正当なものであったが、次第に修正主義的な傾向や反革命的性格が強まり、ソ連の介入を招いた。これがカーダールの理解である。したがって、ラーコシの左翼的偏向とナジの右翼的偏向の中間に自らが存在するという中道路線を標

榜することに、自らのレーゾンデートルがあると考えていた。

しかし、マレンコフ等のソ連共産党幹部はこのカーダールの時期区分を一蹴した。ソ連共産党にとって、一連の事件の細かな性格規定はどうでも良いことだった。「初めから終わりまで反革命だ」という単純な図式で十分だった。カーダール個人の政治（倫理）責任もどうでも良いことだった。ソ連共産党にとって、一時的カードにすぎないカーダール個人の政治的倫理など議論するに値しなかった。反革命を徹底的に一掃することにカーダールを利用できれば、その使命は終わると考えていた。

しかし、以後、カーダールは自らが設定した二つの戦線での闘いを、時には反スターリニズムに、時には反修正主義に重点を移すことで、その時々政治情勢を乗りきろうとする。それが次第にカーダール型の統治スタイルを創ったと考えると、その出発点はこの時期にある。

内憂外患のカーダール

カーダールがその権力基盤を築くのに、かなりの時間を要した。もともと徒党を組んで組織を掌握するというタイプの政治家でなく、動乱前も後もカーダール・グループなど存在しなかった。背後を支える政治勢力が存在しないことが、カーダールの権力基盤の形成を遅らせた。さまざまなグループや潮流が入り乱れている動乱直後の状況は混沌としていた。

国内ではナジ・グループに親近感を抱く活動家や知識人が多かった。再生共産党の執行委員の中でも、ナジ・グループとの提携を考えるものが多かった。他方、内務省管轄下の国家保安局は旧ラーコシ時代の諜報部員や指揮官が支配しており、KGBの後ろ盾を得て、独立した権力を構成していた。KGBの諜報部員が党や政府に送り込まれ、カーダール自身の動向が監視されていることを前提に行動する必要があった。

国外では国際共産主義運動の包囲網が敷かれ、ソ連共産党政治局はカーダールをいずれ使い捨てる人物だとみなしていた。とくに政治局内の

反フルシチョフ派は、ナジに代表される修正主義にたいしてカーダールが十分な闘争を行っておらず、逆にラーコシー派へのソ連共産党の肩入れを56年動乱の原因と考えていることを批判していた。

こうした不安定な政治基盤を安定化させる契機になったのが、1957年3月のソ連共産党・政府との協議である。真偽は明らかではないが、この協議でカーダールが大芝居を打ったと言われている。

この会談の中で、ヴォロシロフやマレンコフは、フルシチョフに宛てられたラーコシの手紙を引用しながら、カーダールの誤りを指摘し、優柔不断を批判した。それにたいして、カーダールは、「ここに来ている者は誰も権力に未練はない。我々を信頼できないならば、ラーコシなり必要な人物なりに権力を与えてもらって結構」と啖呵を切ったのである。さらに、フルシチョフとの個人会談では、「ラーコシやゲルーをハンガリーへ戻せば、再び混乱が起きることは間違いない」と伝えた。

こうした議論を経て、フルシチョフはカーダールに再び信任を与え、かつラーコシー派のハンガリー帰還を認めない決定を下した。保守派によるカーダール批判が止んだわけではなかったが、カーダールは任期延長と政敵のハンガリー帰還阻止を獲得した。ここでも、カーダールはフルシチョフの支持と信頼を得、フルシチョフとカーダールの信頼関係が強まった。

ソ連共産党の信任を受け、かつラーコシー派の復活を阻止したカーダールは、国内の権力基盤の安定化に力を集中することになる。ナジ・グループの処理は、そうした権力安定化の一プロセスに位置するものだった。ナジ・グループをハンガリーにおいて処罰するという方針は、この一連の会談の中で合意された。

ナジ・グループのハンガリー移送

こうしてナジの命運はカーダールの手に任された。1957年4月にルーマニアから移送されたナジ・グループにたいして、カーダールは刑法上

の訴追を行い、裁判で決着させることに拘った。もっとも、ナジ・グループの移送や拘置の情報は、数ヶ月にわたって、中央委員にすら詳らかにされなかった。その間、カーダールは訴追理由と背景の調査を綿密に行うように指示した。もちろん、ナジ・グループの処遇はハンガリー共産党（社会主義労働者党）の政治局が決定するが、形の上で裁判所が自立的に決定するという体裁をとることに拘った。それはラーコシ時代の形だけの裁判で処刑するというスターリン主義的な専横を避けるためだったが、実体的には大差ないものだった。

ナジ・グループのハンガリー移送からナジ処刑までおよそ1年2ヶ月の時間がある。裁判にこれだけの時間を要したのはたんに準備に時間が取られただけではない。いかにハンガリー共産党にナジ裁判が任されたとはいえ、国際的な反響を気にするソ連共産党の意向を無視することができなかったからである。ソ連共産党内部のクーデターやフルシチョフの平和攻勢路線の展開が、ナジ・グループの裁判の行方を左右することになった。

ナジ訴追への準備

訴追の準備を進め、その報告を行うために1957年6月20日にモスクワに向かったカーダールは、十分な協議に行えないままハンガリーに戻った。クレムリンが異常に緊張している様子を肌で感じたカーダールは、一抹の不安感を抱きながらこの時期を過ごした。

事態の結末が明瞭になったのは7月4日である。ソ連共産党の公報は、モロトフ、マレンコフ、カガノヴィッチの除名、ヴォロシロフとブルガーニンの降格を発表したのだ。非スターリン化の行き過ぎを名目にフルシチョフ解任に動いた保守派が敗北した。

ソ連共産党政治局の勢力関係の変化はカーダールの権力安定化を助けた。この追い風に乗って、カーダールは8月の政治局会議でナジ・グループの裁判手順と判決内容の概要を決めたと言われる。しかし、このことはカーダールが死の

直前まで否定し続けたことだ。政治局が判決内容を決めたことになれば、ラーコシ時代と変わらないからである。フサル・ティボールによれば、ハンガリー共産党政治局の決定は9月にソ連共産党に伝えられ、その記録がソ連共産党政治局のメモに残されている。そこには、具体的な量刑は決められていないが、ハンガリー共産党政治局8月21日付けの決議として、「ナジ、ロシオンツィ、ドナート、ギメシュ、マリーテル、スィラージ、キライには最も重い刑を科し、その他の者については罪状と改悛に応じて罰する」というアンドロポフ署名のメモが残されているという。この決定にもとづき、9月から訴追に向けた最後の準備が始まった。

この年の11月、モスクワにおいて社会主義国の共産党・労働者党会議および国際共産主義運動会議が開催され、世界の共産党・労働者党の代表者が集まった。そのひとつの大きなテーマが、ハンガリー動乱の評価とその影響を討議であった。この会議では修正主義にたいする闘争路線が優勢を占め、それがナジ裁判開始の追い風になった。

1958年2月5日午前9時、ナジ・グループ裁判が開始された。予定では短期間に判決が出るはずであった。しかし、翌日に突然、訴追準備の不足という理由で、検察側が協議の延期を提案し、裁判が中止されたのである。

ソ連共産党の逡巡とカーダールの決意

もちろん、裁判中止はハンガリー側の事情によるものではなかった。ハンガリー側の意向に関係なく、ソ連共産党ではナジ裁判の国際的影響が分析され、2月5日の政治局会議でナジ・グループにたいする裁判の結論が議論された。「この裁判を死刑判決で終わらせてはならない」。これが政治局の決定である。

政治局内の保守派を追い出し、世界最初人工衛星スプートニク打ち上げに成功したフルシチョフは、ソ連のイニシアティブで平和攻勢に打ってでようとしていた。世界が注目するナジ・イムレの命運をどう決めるかは、この政策展開

に大きな影響を及ぼす。死刑判決を下し、即座に特赦を施せば、フルシチョフとソ連への国際的支持がさらに広がることは明白であった。

しかし、ソ連共産党がこの結論にどれほど拘ったのか明瞭でない。カーダールはナジ・グループ特赦の道を選ばずに、裁判延期の道を選択した。さらに、ナジ・グループの裁判を延期する一方、その他の者の裁判を継続し、処刑の手続きを行っている。そこにはカーダールの強い決意が表れている。

カーダールは、その長い統治の期間において、ソ連共産党の見解を受け止める姿勢を示しながら、他方で実際の行動ではそれに反する行動をとったことが幾度もある。ソ連共産党政治局はナジ特赦を決めたが、それを強力で強制した節が見えない。4月のフルシチョフのブダペスト訪問でも、フルシチョフはナジ・グループの処理はハンガリーが決める問題だと話したようだ。カーダールにハンガリーの統治を任せた以上、カーダールの意思を優先するというのがフルシチョフの考えだったのだろう。

他方、カーダールの決意は、ナジ・グループの訴追準備に入った段階からはっきりしていた。ソ連共産党の保守派が後退し、旧ラーコシ一派の復活の芽がなくなった時に、その決意が完全に固まった。残された問題はナジ・グループの処理である。これが終われば、動乱の処理が完成し、権力基盤が固まる。そのために、ナジ・グループを最終的に葬る。彼にはそれ以外の選択肢は残されていなかった。

カーダールは5月にモスクワで開かれた国際協議会に参加した際に、フルシチョフに訴追再開を談判したと思われる。フルシチョフの同意を取り付けたカーダールは5月末の政治局会議で裁判再開を決定した。

ナジ・イムレにたいする判決は6月15日午後5時に下され、翌未明の5時、ナジは絞首刑に処せられた。カーダールは多くの非難を浴びたが、ナジ処刑によって党内の権力的地位を堅固なものにしたのである。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)